

# ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会—第25号

Jeff Pippenger

2026-01-11

## 第二十五番

ヨエル書は、四世代にわたり激化してきたラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会の反逆を証言し、その指導部に対峙している。その四世代はエゼキエル書8章にも描かれており、そこで第四世代の二十五人の男たちが太陽にひれ伏す。1888年の反逆から13年後の1901年、セブンスデー・アドベンチスト教会は教会を導くための委員会を組織した。

1901年の総会での大規模な再編の際、当初の総会執行委員会が設置され、その構成員は25名であった。これは、1901年以前の委員会がわずか13名だったのに比べて大幅な拡大である。委員数は年月とともに増えてきたが、イエスはいつも終わりを初めと結びつけておられる。初めは25名で、そのうち1人が指導者であり、これは聖所の職制、すなわち24人の祭司と1人の大祭司に対応している。

ユダとサンヘドリンは、キリストの時代における反逆の二つの象徴である。サンヘドリンはラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会を表している。サンヘドリンがキリストの十字架刑に関与したことは、日曜法の危機におけるアドベンチズムの役割を予表している。サンヘドリン——エルサレムにあった最高のユダヤ人評議会で、祭司長、長老、律法学者から成り、大祭司カヤパが主宰していた——は、イエスの死に至る出来事において中心的な役割を果たした。

イエスがゲツセマネで逮捕された後（ユダの裏切りによって仕組まれた）、彼は夜、カヤパの家でサンヘドリンの前に連れて行かれた。彼らは彼を有罪にするための証言を求め、冒涇と反乱で彼を訴える証人を立てた。

大祭司カイアファが、イエスに自分はメシア（あるいは神の子）かと直接問いただしたとき、イエスが「あなたの言うとおりだ」と肯定して答えると、大祭司は「冒涇だ！」と宣言した。議会は彼を死に値すると断罪した。ローマの支配下で死刑を執行する権限がなかったため、彼らはローマ総督ポンテオ・ピラトにイエスを引き渡し、ローマによる処刑を確実にするために、彼を反乱を扇動した罪で訴えた。実際の十字架刑はピラトの命によりローマ兵が執行したが、それはピラトが祭司長たちと群衆（イエスの死とバラバの釈放を要求していた）からの圧力に屈した後のことだった。

キリストがこの地上におられたとき、この世はバラバを選んだ。そして今日も、この世も教会も同じ選択をしている。キリストに対する裏切り、拒絶、そして十字架刑の光景は再現されてきており、今後もさらに巨大な規模で再現されるだろう。人々は敵の性質に満たされ、それに伴いその惑わしが大いなる力を持つようになる。光が拒まれる度合いに応じて、思い違いと誤解が生じる。キリストを退けてバラバを選ぶ者は、破滅的な欺きのもとで行動している。曲解と偽証はやがて公然たる反逆へとふくれ

あがる。目が悪ければ、全身は暗闇に満ちる。キリスト以外のいかなる指導者に愛着を注ぐ者も、身体・魂・霊のすべてにおいて、あまりにも魅了する迷妄の支配下に置かれ、その力のもとで魂は真理を聞くことから背を向けて偽りを信じるようになる。彼らは罠にかけられ捕らえられ、その一つ一つの行いによって、「バラバを釈放せよ、しかしキリストは十字架につけよ」と叫んでいる。

今なお、この決定は下され続けている。十字架で行われた光景が、今また繰り返されている。真理と義から離れた教会においては、神の愛が魂の内に常住の原理でないとき、人間の本性が何をなし得、何をなすのかが明らかにされている。今どんなことが起ころうとも、私たちは少しも驚くに及ばない。いかなる戦慄すべき成り行きにも驚くには及ばない。神の律法をその不浄な足で踏みにじる者たちは、イエスを侮辱し、裏切った人々と同じ霊を持っている。彼らは良心の呵責もなく、自分たちの父である悪魔のわざを行うだろう。彼らは、裏切り者ユダの唇から出た問いを口にするだろう。「私があなたがたにイエス・キリストを引き渡すなら、何をくれますか？」今なお、キリストはその聖徒たちにおいて裏切られている。Review and Herald、1900年1月30日。

もしその箇所が本当に言葉どおりの意味を持つのなら、「バラバを選ぶ」と特定されている人々は、その箇所が教えていることを理解することができないだろう。その人々こそ、真理を愛さなかったがゆえに、テサロニケ人への第二の手紙にある「強い惑わし」を受ける人々である。彼女はバラバを選ぶ者たちについて、こう述べている。「キリスト以外のいかなる指導者に愛情を注ぐ者も、肉体・魂・霊のすべてにおいて、人をうっとりさせるほどの陶酔の支配下に陥り、その力のもとで魂は真理を聞くことから背を向け、偽りを信じるようになる。」バラバを選んでいる者たちは、十字架と日曜法という道標に至る前からサタンの支配下にある。そのような状態では、その箇所が教えることを理解することは到底できない。ゆえに彼らはこう示唆するだろう。「ホワイ姉妹がこれらの言葉を記した当時の状況は、あの特異な歴史のためであって、今のためではない」と。あるいはこう言うかもしれない。「彼女はキリスト教一般について語っているのであって、セブンスデー・アドベンチストに直接当てはまるものではない」と。ばかげている。

もちろん、ホワイ姉妹がそれらの言葉を書いた当時の歴史的状況は、実際には彼女の個人的な歴史についての解説でした。しかし、『黙示録』のヨハネと同様に、預言者が書けと命じられるときには、「あなたが見たこと、今あること、そしてこの後起こること」を書けと言われます。預言者が今ある事柄を記すとき、それは同時に、これから起こる事柄をも記していることになるのです。

アドベンチズムの指導部は、エゼキエルの二十五人によって象徴されており、彼らはまた、コラ、ダタン、アビラムに与した二百五十人と預言的に対応している。同様に重要なのは、1888年およびミネアポリス総会における反逆者たちが、コラ、ダタン、アビラムの反逆を繰り返しているとホワイ夫人によって指摘されたことである。ホワイ夫人は、黙示録18章の天使が下ってその栄光をもって地を照らすとき、後の雨が始めると、はっきり教えている。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

ホワイ夫人は、黙示録18章の天使が1888年の総会においてA・T・ジョーンズとE・J・ワグナーのメッセージとともに降りてきたと、直接教えている。彼女がその総会にいたとき、反逆の有様にあまりにも圧倒され、荷物をまとめて立ち去る決心をしたが、天使はこれはコラの反逆の繰り返しであるから、とどまってその歴史を記録しなければならないと告げた。もしそれが終わりの時代への証しのためでないのなら、なぜ天使はそれを記録させようとしたのか。もしそれが終わりの時代のための証しであるなら、何を意味し得るだろうか。すなわち、日曜法の危機において、特にそれに至るまでの歴史において、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会がサンヘドリンの足跡をたどるようになる、ということ以外に。

ジョーンズとワグナーのメッセージは、「まことの信仰による義認のメッセージ」、「ラオデキヤへのメッセージ」、「キリストの義のメッセージ」、そして「第三天使のメッセージ」として示された。反逆者たちはそのメッセージに抵抗し、また「預言の霊」の導きと、その会合のために選ばれた使者たちをも退けた。ホワイ夫人もまた、ニューヨーク市の巨大な建物群が神の力のひと触れによって打ち倒されるとき、黙示録18章1～3節が成就すると教えている。9/11以降、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会の指導部は、コラの反乱、二十五人の古老たちの反逆、1888年の指導部の反逆、そして十字架に至る時期のサンヘドリンの反逆を繰り返してきた。その二十五人は、偽りのレビの祭司職を表す象徴である。

レビ人は奉仕を始めるとき25歳であった。

主はモーセに言われた。「レビ人に関する規定は次のとおりである。二十五歳以上の者は、会見の幕屋に入って奉仕に当たることができる。五十歳に達した者は、その奉仕に当たることがやめ、もはや仕えない。ただし、会見の幕屋では兄弟たちとともに責務を守るが、作業は行わない。レビ人の任務については、あなたはこのようにしなければならない。」民数記 8:23-26

レビ人は25歳で奉仕を始め、50歳になるまで25年間仕える。マラキ書3章の契約の使者は、彼が1844年10月22日に行ったように、日曜法のときにレビ人を精錬し、また清めている。

見よ、わたしはわたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を備える。あなたがたが求めている主、すなわちあなたがたが喜びとする契約の使者が、にわかにご自分の宮に来る。見よ、彼が来る、と万軍の主は仰せられる。

しかし、彼の来られる日を誰が耐えうるだろうか。彼が現れるとき、誰が立っていられようか。彼は精錬する者の火のようで、さらし屋の灰汁のようである。彼は銀を精錬し清める者として座り、レビの子らを清め、金や銀のように彼らを精錬して不純物を取り除き、彼らが主に義にかなう供え物をささげるようにする。そのとき、ユダとエルサレムの供え物は、昔の日のように、いにしへの年々のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 3:1-4。

象徴としての数字「25」は、忠実なレビ人だけでなく、偽のレビ人も表している。したがって、象徴としての「25」は、賢い乙女と愚かな乙女、羊と山羊、麦と毒麦のように、二種類の礼拝者の分離を示している。数字「25」はレビ人そのものを表すだけでなく、同

じくくらい重要なことに、レビ人たちの分離（ふるい分け）をも象徴している。その分離は日曜法の時に起こり、神の預言の言葉の主要な主題である。マタイ25章が、マタイ24章におけるイエスの世の終わりの預言の単なる続きであるのは、ふさわしいことである。

イエスは宮から出て行かれた。すると、弟子たちが宮の建物を見せるために、みもとに近寄ってきた。イエスは彼らに言われた。「これらすべてのものが見えないのか。まことにあなたがたに言う。ここでは、崩されずに石が石の上に残ることは、一つもないであろう。」マタイによる福音書24章1、2節。

イエスが神殿を去ったとき、二度と戻ることはなかった。二十三章の最後の数節で、イエスはサンヘドリンに裁きを宣告したが、その裁きは「八つの」わざわいとして表されており、それは箱舟の八人、割礼の第八日、復活の第八日、アブラハムの八代（430年）などの「八」を偽って模倣するものである。「八」という偽りの数は、偽のレビ人に対応する。

まことに、あなたがたに言います。これらすべてのことはこの世代に起こるでしょう。

エルサレム、エルサレムよ。預言者たちを殺し、自分に遣わされた者たちを石で打つ者よ。わたしは何度、あなたの子らを集めようとしたことか。めんどりが翼の下にひなを集めるように。しかし、あなたがたはそれを望まなかった。見よ、あなたがたの家は、荒れ果てたまま、あなたがたに残される。

あなたがたに言う。これから後、あなたがたが「主の御名によって来られる方は祝福されている」と言う時までには、あなたがたは私を見ることはない。マタイによる福音書 23:36-39。

マタイによる福音書第22章は、悪しき者を束にして縛ることのたとえで締めくくられ、また、キリストと揚げ足取りをするユダヤ人たちとの最後のやり取りで結ばれる。さらに第24章では、彼は神殿を最後に後にし、古代イスラエルへの働きをやめられる。その章は始めに戻るかのように、彼らの家が空のまま彼らに残されたという宣言で終わり、彼が最初に神殿を清められたときに「わたしの父の家」と呼んだものは、今や空のユダヤ人の家となっていた。

第24章では、イエスは神殿とその差し迫った破壊についての質問に答えることになる。その破壊はまさにその世代に起こるはずであり、すなわちその世代は「まむしのすえ」であった。彼はその神殿を去り、二度と戻らなかった。したがって、彼が述べる預言は、文字どおりのイスラエルではなく霊的なイスラエルに向けられている。古代イスラエルのとくと同様に、キリストがラオデキア的なセブンスデー・アドベンチスト教会という神殿を去るとき、同時に、十四万四千人の人間の神殿は永遠に神の神殿と結び合わされる。イエスが古代イスラエルの神殿を去られたとき、彼はかつての契約の民を永遠に離縁された。

マタイの11章から22章は、創世記の11章から22章にわたる系列のオメガに当たる。創世記11章でその系列が始まる時、それは同時に、バベルとバベルの死の契約の始まりをも画する。これは黙示録17章11節においてオメガの成就に至るが、この節は、11章から22章を構成する諸節のちょうど中心に当たる。創世記、マタイ、黙示録のそれぞれにおいて、

11章から22章の間は、旗印またはその偽の旗印を強調している。創世記では割礼、マタイではキリストがその教会を建てるとしたペテロと岩、そして黙示録では、かつてあり、今もあり、やがて上ってくる偽の獣、すなわち七つに属しつつ八番目であり、その後、に竜と結び合わされる者である。

十一と二十二は、神性と人性の結合を表す象徴であり、それは、キリストがご自身の律法を私たちの心と思いに書き記すことによって表されている事柄そのものである。11と22は、十四万四千の契約の象徴である。マタイによる福音書23章では、偽の祭司職は八つのわざわいを受け、同時に、真の祭司職が油注がれる。祭司たちは七日間聖別され、八日目に務めを始めた。

祭司たちが八日目に奉仕を始めることへとつながる七日間の聖別の記述が民数記8章1節から始まっているのは、偶然ではない。なぜなら、「81」は祭司の象徴だからである。

主はモーセに仰せになった。「アロンとその子らを連れ、衣服、注ぎの油、罪のささげ物としての雄牛一頭、雄羊二頭、そして種入れぬパンのかごを取りなさい。また、会見の天幕の入口に全会衆を集めなさい。」モーセは主が彼に命じられたとおりに行った。すると会衆は会見の天幕の入口に集められた。モーセは会衆に言った。「これが主が行うように命じられたことである。」...

そしてあなたがたは、あなたがたの任職の日々が終わるまで、七日の間、会見の天幕の入口から出てはならない。七日間、あなたがたの任職が行われるからである。この日行ったとおりに、主はあなたがたのために贖いをするため、こうするように命じられた。それゆえ、あなたがたは昼も夜も七日の間、会見の天幕の入口にとどまり、主の務めを守りなさい。そうしないと、あなたがたは死ぬであろう。私はそのように命じられているのだから。こうしてアロンとその子らは、主がモーセを通して命じられたことをすべて行った。八日目になって、モーセはアロンとその子ら、およびイスラエルの長老たちを呼び集めた。彼はアロンに言った、「罪祭のために若い雄の子牛を、全焼の供え物のために傷のない雄羊を取り、主の前にそれらをささげなさい。」...そしてモーセは言った、「これが主があなたがたに行うよう命じられたことである。そうすれば主の栄光があなたがたに現れる。」...そしてアロンは民に向かって手を上げ、彼らを祝福し、罪祭と全焼の供え物と和解の供え物をささげ終えて下ってきた。モーセとアロンは会見の天幕に入り、出て来て民を祝福した。すると、主の栄光がすべての民に現れた。主の前から火が出て来て、祭壇の上の全焼の供え物と脂肪を焼き尽くした。民はみなこれを見て叫び、ひれ伏した。レビ記 8:1-5, 33-36; 9:1, 2, 6, 22-24.

第二十三章は、本物のレビ人が封印される時に明らかにされる偽のレビ人を特定している。マタイの第二十二章は、もはやだれもイエスに質問しなくなったところで終わり、続く第二十三章で彼は八つの災いを宣告し、サンヘドリンの猶予期間が終わったこと、そしてその時から執行の裁きが始まることを示した。第二十四章では、彼は神殿をユダヤ人の家であると述べている。これらの章の順序を見て取ることが重要である。

マタイによる福音書第11章から第22章は、神に選ばれた民との契約という文脈において、十四万四千人への封印の完了を示している。アルファである第11章におけるパルモニの象徴性と、オメガである第22章における彼の象徴性は、これらの章の物語を補完してい

る。

第二十三章は、贖い、すなわち二十三という数が表す神と人間の結合である。だが、この章は、毒麦、偽の祭司職、偽のレビ人に対する裁きの執行について語っている。すべての祭司はレビ人であったが、すべてのレビ人が祭司であったわけではない。レビの子孫のうち、祭司職に就く資格があったのはアロンの血統だけであった。聖書によれば、レビ人は二十五歳で奉仕を始めることになっていたが、コハテの子らは三十歳で奉仕することになっていた。

主はモーセとアロンに言われた。「レビの子らのうちからコハテの子らを、その氏族ごと、父祖の家ごとに、三十歳から五十歳までの、会見の幕屋で奉仕の務めに就くすべての者を数えよ。」民数記 4:1-3.

「30」という数は、レビの子ケハテの血統に属していた祭司たちを表す。ケハテの子はアムラムで、アムラムはアロンの父である。レビは「神に結び付けられた、あるいは神と結び合わされた」を意味し、ケハテは「御臨在のまわりに集められた」を意味する。アムラムは「高められた民」を、アロンは「光の担い手、または高められた仲保者」を意味する。これらは共に、紅海からシナイへと至る歩みをたどらせ、こうして神と十四万四千人との契約を象徴する。十四万四千人は、神の神殿と結び合う人間の神殿であり、キリストが再び御手を伸ばしてその残りの民を御自分の聖所に集め入れるとき、そこで彼は、彼らが天の大祭司によって照らされる中で、彼らを引き上げて高くする。ちょうど彼がシャデラク、メシャク、アベド・ネゴを照らしたように。

30という数は祭司たちのための準備期間を表し、また25はレビ人の年齢として、積み重ねの論法でその30に適用される。というのも、すべての祭司はレビ人だが、すべてのレビ人が祭司というわけではないからである。30は終わりの時である1989年に始まった準備期間を表し、その期間は米国の日曜法で終わる。レビ人を象徴する数としての25は、二つの区分の間の分離の象徴でもあり、祭司に関しても分離を指し示す。25は日曜法においてレビ人と偽りのレビ人との分離を画し、また、真の祭司と真のレビ人という文脈においても区別を生み出す。ただし、それは偽りのレビ人の場合のような否定的な分離ではない。

ケハテは、（ゲルシヨンとメラリと並ぶ）レビ人の三つの主要な分派の一つであった。祭司の系統は、ケハテの子孫であるアロンを通して継承された。アロンはレビから四代目の子孫であり、祭司職の特権は、このケハテ系の中でも彼の男子の子孫に限定されていた。ケハテ人全体（ケハテのすべての子孫）は、最も聖なる器物を担ぐ栄誉を与えられていたが、祭壇や聖所で実際に祭司の務めを行うことができたのは、アロンの家系だけであった。アロンは、ヨエル書の「老人たち」またはエゼキエル書第八章で太陽にひれ伏す「古老たち」と同じ第四世代に当たる。

祭司のための24の輪番組の制度（楽師や門衛などの補助的役割を担う、祭司ではないレビ人にも同様の制度があった）は、ダビデ王が制定した。ダビデはアロンの子孫を、交代で奉仕する24の組に編成した（歴代誌第一24章1-19節）。ダビデは、祭司ザドク（エレアザルの系統）とアヒメレク（イタマルの系統）の助けを得て、エレアザルの家系のほうが大きかったためそこから16組、イタマルの家系から8組の、計24組に分けた。奉仕の順序はくじで定められた。

各組は一年に二度、安息日から次の安息日までの一週間奉仕し、さらに大祭（過越、五旬節、仮庵の祭り）には全組がそろって奉仕した。ダビデは同様に、祭司ではないレビ人も賛美や門衛などのために二十四の組に編成した（歴代誌第一23-26章）。この制度はソロモンの時代に実施され（歴代誌第二8:14）、第二神殿時代を通じて継続した。バプテスマのヨハネの父ゼカリヤはアビヤの組に属していた（ルカ1:5; 歴代誌第一24:10）。祭司の二十四の組の順序はくじで定められ、ゼカリヤはアビヤの組、すなわち二十四の組のうち「第八組」に属していた。ゼカリヤは「神は覚えておられる」を意味し、彼の父の名アビヤは「神は私の父である」を意味する。

天の父は、メシアの道を備える使者を起こすというご自分の約束を覚えておられた。しかし、ゼカリヤはまた日曜法とも一致している。というのも、そこでは、人々がいつも覚えるべき日である安息日が、最後の試金石となるからである。ゼカリヤは、アビヤの組、すなわち「第八」の組に属する祭司を表している。ゼカリヤは天使のことばを信じず、息子ヨハネが生まれるまで話せなくなる。ヨハネが生まれると、ゼカリヤはヨハネという名についての話し合いに加わり、そして話す。終わりの時代における預言的な語りとは、アメリカ合衆国が竜のように語るときのことである。

さて、八日目になったとき、人々は幼子に割礼を施しに来て、父の名にちなんでその子をゼカリヤと名づけようとした。ところが母は答えて、「いいえ、その子はヨハネと呼ばれます」と言った。人々は彼女に言った。「あなたの親族には、この名で呼ばれている者はひとりもない」。そして彼らは父に合図をして、なんと名づけたいのかをたずねた。彼は書き板を求め、「その名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。するとたちまち彼の口が開き、舌がほどけ、彼は語り、神をほめたたえた。ルカによる福音書1章59-64節。

バプテスマのヨハネは、父と同じくアビヤの第八の組に属している。ヨハネの割礼のとき、八日目に彼の名は変えられる。バプテスマのヨハネは、神と契約関係にある第四世代の祭司たちを表している。アメリカ合衆国が竜のように語るとき、神は彼らの名を（ラオデキアからフィラデルフィアへ）変え、契約のしるしによって彼らに印を押す。

私たちは神の宮である。宮に言及する預言の言葉は、男女それぞれ個人として、また共同体としての私たちに語りかけている。というのも、神の教会もまた宮だからである。そしてもちろん、天にある宮があり、主の宮を建てるのはキリストである。土台を据え、宮に親石を置くのも彼である。象徴としての数「25」について言えば、25はレビ人を表す。彼らはマラキ書3章で偽りのレビ人からふるい分けられ（分離され）、同じ箇所ですくめられる。エゼキエル書40章から48章には、象徴的な宮が詳しく描かれている。いのちの水がその宮から流れ出て、地を満たす。

神が御自分のしもべたちを通して、御名があがめられるために成し遂げようとしておられる御業は、実に驚くべきものである。神はヨセフをエジプトの国民にとってのいのちの泉とされた。ヨセフによって、その民全体のいのちが保たれた。ダニエルを通して、神はバビロンのすべての知者たちのいのちを救われた。これらの救いは目に見える教訓であり、ヨセフとダニエルが礼拝した神と結びつくことによって彼らに差し出されている霊的な祝福を、人々に示したのである。今日も同じように、神は御自分の民を通して世界にも祝福をもたらそうとしておられる。心にキリストが住んでおられ

るすべての働き人、またその愛を世界に現そうとするすべての人は、人類を祝福するために神とともに働く者である。救い主から他の人々に分かち与えるための恵みを受けるとき、その人の全存在からは霊的ないのちの流れが湧き出る。キリストは大医師として、人類という家族に罪が残した傷をいやすために来られた。さらに、主の御霊は御自分のしもべたちを通して働き、罪に病み苦しむ人々に、身体にも魂にも有効な力強い癒しの力を授けられる。「その日には」と聖書は言う。「ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れのための泉が開かれる。」ゼカリヤ13:1. この泉の水には、肉体の病も霊の病も癒す効能が備わっている。

この泉から、エゼキエルが幻で見た大いなる川が流れ出る。「この水は東の地方へ流れ出て、荒野に下り、海に入る。海に注がれると、その水はいやされる。やがて、川に行くところには、動くすべての生き物が生きようになる……。また、川のほとり、その岸のこちら側にもあちら側にも、食物となるあらゆる木が生え、その葉は枯れず、その実も尽きることがない。各月ごとに新しい実を結ぶ。これは、その水が聖所から流れ出ているからである。その実は食物となり、その葉は薬となる。」エゼキエル書47章8-12節. 証言 第6巻 227頁.

エゼキエルの神殿は最高度の預言的象徴であり、ヨハネは黙示録11章で、神殿を測るように、ただし外庭は除外するように命じられた。まさにそのことをエゼキエルの神殿に適用すると、神殿の寸法の中で最も顕著な二つの数が祭司職を表していることが分かる。50キュビトは最も顕著な数であり、各門の施設全体の長さとして11回繰り返される（エゼキエル書40:15, 21, 25, 29, 33, 36 など）。50はまた、ある壁や部屋の長さにも用いられている（42:7-8）。それは外側の敷居から内側の敷居に至る門の通路全体を規定している。

25キュビトは、明らかに二番目に目立つ寸法である。これは、門の複合施設の幅と広さとして10回繰り返されている（エゼキエル 40:13, 21, 25, 29, 30, 33, 36）。50キュビトと25キュビトを組み合わせると、六つの主要な門において一貫した50×25キュビトの長方形パターンを成す。この50×25の組み合わせが、内側の区域へ通じる門の建築記述を支配している。神殿建築そのものにおいて、これほど系統的に繰り返される別の組は存在しない。

レビ人は25歳で現役の奉仕に就いた（民数記8:24：「二十五歳以上の者は、奉仕に従事するために入る」）。彼らは50歳まで仕えた（民数記4:3, 39, 43:8:25：「五十歳まで」）。これにより、現役の奉仕期間はちょうど25年となる（50 - 25 = 25）。

このように、レビ人の奉仕の25年という期間は、レビ人が仕えたまさにその場所である神殿の門と構造を支配する二十五キュビト×五十キュビトの寸法に、直接反映されている。エゼキエルの神殿の主要な寸法、すなわち勝利の教会と十四万四千人のための神殿の寸法は、彼らが仕えることになっていたまさにその神殿の中に建築的に組み込まれている。ちょうど、神の民が仕えることになっているまさにその神殿のうちに四十六本の染色体が組み込まれているのと同様である。パルモニは、彼の花嫁となるべき共同体としてのからだの神殿と、個々の人間という神殿の双方に、ご自身の署名を記した。

続きは次回の記事でお届けします。

責任ある立場にある者は、世の自己放縦でぜいたくな原則に染まってはならない。というのも、そのようなことをしている余裕はないからであり、たとえ余裕があったとしても、キリストに倣う原則がそれを許さないからである。さまざまな教えを与えなければならない。「主は誰に知識を教え、誰に教義を悟らせるのか。乳を離れ、乳房から引き離された者たちに、教訓に教訓を、教訓に教訓を、定めに定めを、定めに定めを。ここにも少し、あそこにも少し。」このようにして、神の言葉を信じる親は、主の言葉を子どもたちの前に忍耐強く差し出し、彼らの前に置き続けなければならない。「主はども唇と異なる言葉をもって、この民に語られる。主は彼らにこう言われた。これは、疲れた者を休ませる安息である。これは潤いである。だが彼らは聞こうとしなかった。しかし主の言葉は、彼らにとって、教訓に教訓を、教訓に教訓を、定めに定めを、定めに定めを。ここにも少し、あそこにも少し、となった。彼らが行って後ろに倒れ、砕かれ、わなにかかって捕らえられるためであった。」なぜか—それは、彼らに与えられた主の言葉に耳を傾けなかったからである。

これは、教えを受けることなく自分の知恵を尊び、自分の考えに従って自ら事を行うことを選んできた者たちを意味する。主は彼らに試みを与え、主の勧めに従う立場をとるのか、それともそれを拒んで自分の考えどおりに行うのかを明らかにされる。そして彼らが後者を選ぶなら、主は彼らをその必然の結果に任せる。私たちのあらゆる歩み、神へのすべての奉仕において、主は私たちに語られる。「わたしにあなたの心をささげよ」。神が求めておられるのは、従順で、教えを受け入れる心である。祈りを優れたものに行っているのは、それが愛に満ち、従順な心から息吹のように生み出されているという事実である。

神はご自分の民にいくつかのことを求めておられる。もし彼らが、「私はこのことを行うために心を明け渡すことはしない」と言うなら、主は天の知恵なしに、彼らが自分では賢明だと思い込んでいる判断に従って進んでいくのをお許しになり、この聖句 [イザヤ 28:13] が成就するまでそうさせておかれる。あなたがたは、「自分の判断と調和するある程度までは主の導きに従うが、その後は主の似姿に従って形づくられることを拒み、自分の考えに固執する」などと言ってはならない。問うべきは、「これは主のみこころか」であって、「これは——の意見や判断か」ではない。牧師たちへの証言、419。